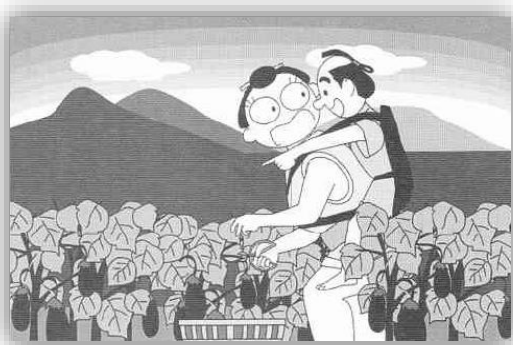
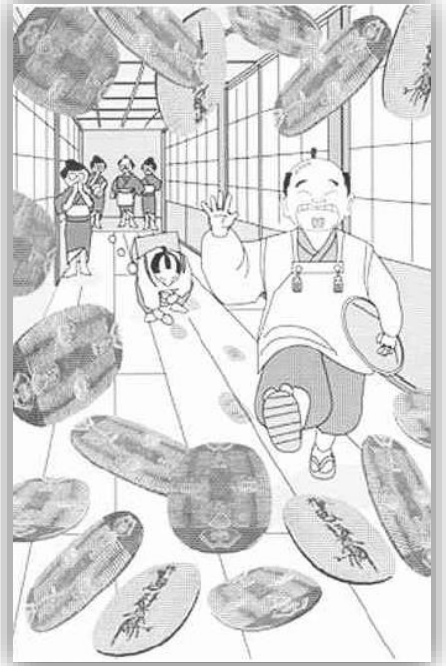


大井町昔ばなし



大井町教育委員会

大井町昔ばなし

もくじ

- ◆ 谷越の鈴・・・・・・・・・・・・・・ 3ページ
- ◆ 七滝の主・・・・・・・・・・・・・・ 5ページ
- ◆ 富士見塚の伝説・・・・・・・・・・・・ 7ページ
- ◆ 了義寺の弁天さま・・・・・・・・・・・・ 9ページ
- ◆ 赤坂の袖切り神・・・・・・・・・・・・ 11ページ
- ◆ 狐に化かされた話・・・・・・・・・・・・ 12ページ
- ◆ 曾根家の伝説・・・・・・・・・・・・ 14ページ
- ◆ むじなの化けた話・・・・・・・・・・・・ 15ページ
- ◆ 狐を化かした話・・・・・・・・・・・・ 18ページ
- ◆ 狼が礼にキジをもってきた話・・・・・・ 20ページ
- ◆ 死期が知れた話・・・・・・・・・・・・ 21ページ
- ◆ 種茄子の話・・・・・・・・・・・・ 22ページ
- ◆ しゃもじの入道の話・・・・・・・・・・・・ 23ページ
- ◆ 天狗の話・・・・・・・・・・・・ 24ページ
- ◆ 人魂の話・・・・・・・・・・・・ 26ページ
- ◆ 狐火の話・・・・・・・・・・・・ 27ページ
- ◆ 狐づきの話・・・・・・・・・・・・ 28ページ
- ◆ みこし入道の話・・・・・・・・・・・・ 29ページ
- ◆ 弘法の硯水・・・・・・・・・・・・ 30ページ
- ◆ お蝶切り藪・藁人形の話・・・・・・・・ 31ページ
- ◆ 雨乞い天道念仏・・・・・・・・・・・・ 32ページ
- ◆ 花女郎松の話・山之神の話・・・・・・ 33ページ
- ◆ かりが音松の話・・・・・・・・・・・・ 34ページ

谷越の鈴 たにごえ すず

最明寺第38世 故加藤宥雄師記

相模の狩野というところに杉本という物持ちの百姓家
があつて、そこに一人娘がいました。13歳のとき、ふと
した病がもとで床に伏していたところ、とうとう死んでし
まいました。

父母は、死んでしまった娘の死骸を、一日一夜そのまま
にして、泣き悲しんでいましたが、夜の七つ時にふと生き
返りました。

父母は、ひどく喜んで、気分はどうかと聞いたところ、
「この辺に、浄連上人という人がいられますか」と娘が
聞きました。

母親は「いられるとも。それは浄連上人という人で、ほ
れ、松田山の上で、極楽往生の修行をしてござる、尊い
お上人様だ。おまえはどうしてそんなことを聞くのだ」と
尋ねました。

「私が死んでから、午頭馬頭の鬼に責められて、知らない山路を
いくと、見ようとしても見えないし、なにか言おうとしても言
うことができないんです。ああ、苦しいと思っていますと、谷の
方から鈴の音がかすかに聞こえてきました。その鈴の音を聞く
と、急に苦しいのが軽くなって、眼をあけて見ると、錫杖を
ひっさげ、数珠をつまぐって高僧が立っていらっしゃる」

「私は『ここはどこですか』と高僧に尋ねました。

『ここは死出の山だ。死んだ人はみんなここへ来るんだよ』

『谷の方から、鈴の音が聞こえるが、あの音はどこから聞こえ
てくるのですか』

『あれは、浄連という僧が、極楽往生の修行をしてござる鈴の
音だよ。あなたは、その浄連上人のお守りをいただいて持って
いたので、鈴の音が聞こえたのだ。』と、高僧の言われることは
を聞いたと思うと、生き返ったんです」と娘は語りました。

「いつだったか、松田山へ登ったとき、あの上人から印判いんぱんをもらって、おまえの肌守はだまもりにしたが、きつとそのせいでよ」

「お母さん、私を早くあの松田山へ連れて行ってください。早く、如来にょらいさまを拝みおが、上人に会いたい」
「そんなに急がなくてもいいではないか」

「私は上人さまのおかげで、生き返ったのです。一刻も早く行きたい」

母親はそれとおりたとうなずいて、駕籠かこに乗せて松田山へ登っていきました。すると山の麓ふもとで音がします。

「冥土めいどで聞いたのも、あの鈴の音だ」と、娘が言つと、娘は駕籠を降りようとしています。娘はメキメキと達者たっしゃになつて、父母同道ふぼどうだいして山上に上人を尋ね、如来を拝することができたそうです。

- 七つ時（午前4時ごろ）
- 上人（仏道の修行に励む高僧）
- 牛頭馬頭（地獄の獄卒）
- 錫杖（僧が持ち歩く杖）
- つまぐる（指先で一つ一つはじく）
- 死出の山（死後の世界にある山）
- 肌守（はだにつけて、いつも持っている守の札）



七滝の主 ななたきぬし

採集再話 石渡正氏

東海道線の二宮(二宮町)と国府津(小田原市)の中間に小さな鉄橋があります。その下を流れる川が押切川おしきりがわです。この押切川をさかのぼっていくと、中村川なかむらがわになり、相模武士さがみぶしの一人、中村宗平むねひらの活躍した中村郷なかむらじょうに行き着き、さらに中村川に沿って3、4里もいくと、川はいよいよ細くなって、西側の山がせまってきます。そして、東名高速道路の鉄橋をくぐっていくと、中村と分かれて大井町高尾となります。

高尾は、現在20戸くらいの山村ですが、清雲寺せいうんじや薬師堂やくしだうあり、観音堂かんのんどうなどがある、むかしはかなり栄えたところであったようです。

高尾で中村川はさらに二つに分かれ、右に曲がって山奥に入っていく川が本流で、この本流の奥に棚沢たなざわという、人家もなにもないところがあります。ここは大小7つの滝が流れており、村人たちはこの滝を「七滝」と呼んでいます。

今から6、7百年も前のむかしのことです。高尾の東というところに栄左衛門えいざえもんというきりが住んでいました。あるとき、手下を一人連れて棚沢の森に木を切りにいきました。何本かの木を切り倒し、のどが渴いたので、滝つぼへ水を飲みに降りていきました。

すると、その滝つぼに一匹のかわいいへびがいました。栄左衛門は、ふといたずらをしてやろうという気になり、そばに落ちていた木の枝を拾って、その小さなへびの頭をちよいとたたいたのです。ふしぎなことに、そのへびは少し大きくなったような気がしました。

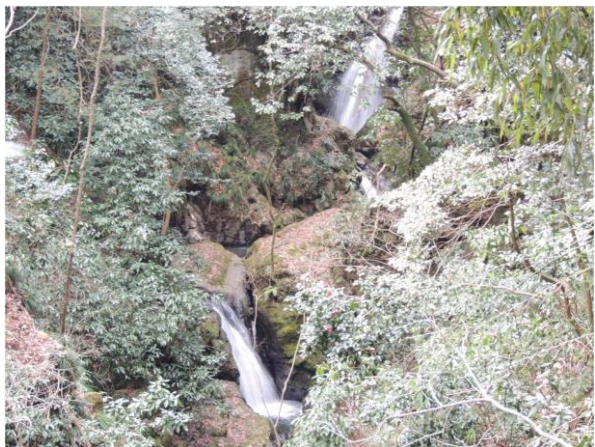
そこで、「気のせいかな。へんだな」と思って、また頭をちよいとたたくと、たしかに大きくなっていくのです。おもしろはんぶん、たしかめたさで、なんどかたたいているうちに、とうとうへびは太さが一升ぶんくらいもある大蛇になってしまいました。

やがて大蛇はかま首を持ち上げたかと思うと、栄左衛門めがけて、口をかつと開き、真っ赤なほのおをふきかけてきました。

栄左衛門はこしをぬかしそうなほどおどろき、真っ青になって家にげ帰りましたが、そのときのこわさで、とうとう1か月もねこんでしまいました。

村人たちは、その話を聞いて、それはきっと七滝の主だとうわさしあって、今でも七滝にはだれも近づかないということです。

● 3・4里(12〜16キロメートル)



七滝



富士見塚の伝説

故小島巖氏 所収

餘綾の丘陵の北端には、往古から街道が通じている。矢倉沢往還の脇往還である。四十八瀬の流れが激しいとき、旅人は富士見塚のある篠窪の丘陵を越えて東路へ旅した。この街道ぞいには今も語り伝えられている伝説や民話が数多く残っている。

富士見塚のあるほとりは、榎の本といって、一里塚の跡や、村人が繁栄を願った福幸の神の跡地がある。大正年代のころには不思議な石などがあったが今はない。

北は大山道、南は小田原道、飯泉観音の道、西は富士道で相交わっている。標高250メートルほどの丘陵である。富士見塚は約3.3平方メートルの芝生地であった。今はその付近はみかん園になっている。

頼朝公が関東の武将を多数従えて威風堂々と鎌倉を進発し、この丘陵に富士の絶景を眺めて、しばし駒をとどめて休息した地として、何百年も村人は語り伝えてきた。

この丘陵から見る富士は、前方に箱根、足柄の連山、西丹沢の山々、その間から裾野を遠くひいた極めて雄大で、かつ、やわらかい富士の霊峰が見える。眼下に酒匂川の流れが足柄の町や村々を縦断して相模湾に注ぐ。はるか遠く、かつて頼朝公が苦難の道を歩んだ伊豆の山々が見える。この丘陵に駒をとどめた將軍の心境はいかがであつたろうか。

近年になってわが大井町では、富士見塚ハイキングコースとして郷土史や自然に親しむ人々の憩いの場所となっている。ここには明治初年に建立された富士地神の塔があり、100メートルほど北方へ下ると、三島神社の森がある。俗に椎の木森といって、大井町天然記念物に指定されている。千年を経たであろうと推定される椎の木や20数本の椎の木の自然林がある。

富士見塚の付近には、庚申塔の道標や后土神の道標や観音像の道標、出羽湯殿山信仰の寛文年間の碑や、江戸時代の名僧徳本行者の碑などがあったが、明治の初めに三島神社の境内や地福寺の境内に移された。

富士見塚のほとりに立つと、静かに移り変わる歴史の推移を思わずにはいられない。いまも松田町神山の北村家の祖が富士の巻狩りのとき、はた杭御用を勤めたという言い伝えや、篠窪の小島家には、頼朝公の陣釜じんがまと言い伝えている釜が大切に保存されている。

● 餘綾…現在の大磯・二宮周辺

● 往古…昔

● 街道…交通上主要な陸路

● 往還…行き帰りの道

● 矢倉沢往還…駿河から足柄峠を越え、伊勢原を過ぎ、江戸に続く街道

● 一里塚…街道の一里ごとに土を盛り、上に榎などの木を植えて、しるしとした塚。



富士見塚の碑

了義寺の弁天さま

第25世 故 武山弘道師記

大井町山田の了義寺の東の山腹に弁天さんが祭ってある。いつのころからお祭りされたかはわからない。里の人々は山田の寺の弁天さんとしてお参りする人が多い。誰いうとなく老人たちは、「山田の弁天様は江の島弁財天と関係深く、なんでも聞いてくださる」という。朝早くお参りにくる人が多い。なにか願いごとがあつて参詣されることと思うが、一見家庭的にも中流以上の人が多いようだ。

むかし小田原の芸者屋に借金のかたにももられてきた小娘があつた。百姓の娘で年貢の金が払えないため、先に姉娘も藤沢の方へもられていった。

この姉が日ごろ弁天さんを信仰していたので、別際に妹にいうには、「困ったこと、苦しいこと、

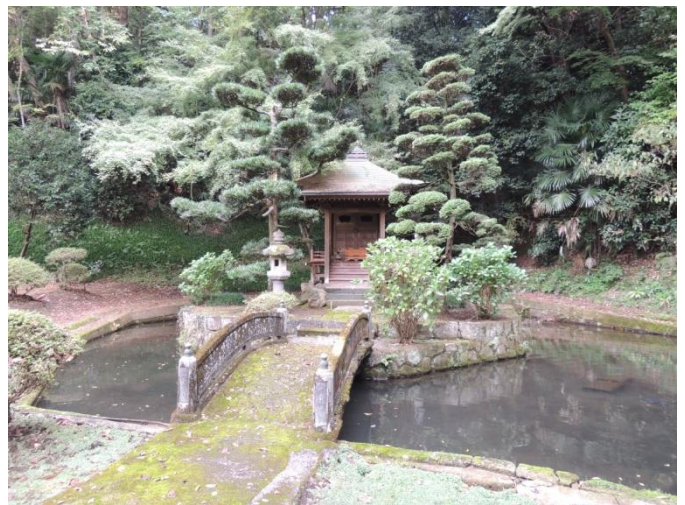
自分にできないことがあったら、これより東の方に了義寺という禅寺があり、大勢の若い坊さんが修行しておられる。その寺の一角に滝があり、弁天様がお祭りしてあるのだ。この弁天さんにお参りしてお願ひしてごらん」といって去つた。この妹が小さいときのこと、どちらに山田があるのかも知らなかつた。

小間使いをしているうち、娘も15歳になつた。姉のように芸者になつて身を立てることになつたが、どうしたものか客がつかなくて、商売にひびくといつて、主人より毎日のように小言を聞く始末。ある夜、夢枕に現れた美しい弁天様が、琵琶をもつて現れ、「これより東の山腹にある禅寺の境内にある弁財天にお参りなさい。必ず商売もつまく行くだろう」という夢を見た。

このことを主人に話すと、主人はかねがね松田の宿の近くに弁財天が祭ってあり、お参りする人が多いと聞いている。朝早く立てば日帰りできるので主人と娘の二人で了義寺を訪ねた。住職にこの次第をばなし、供養くようをしてもらい、帰った。その後商売の方も日々繁盛はんじょうしていったという。

このことを聞いた当時の芸者衆は、暇ひまのある日は一日がかりで了義寺を訪れ、お参りしたという。そのときは自分の名前を書いた手ぬぐいを弁天社の近くの木の枝にかけて帰ったという。

支那事変しなじへんが始まったところから芸者衆の仕事も変化していったらしく、お参りは少なくなったが、この近隣きんりんの人々のお参りが年々増加している。



了義寺 弁天社

あかさか そでき がみ
赤坂の袖切り神

あふりやま

小田原の方から伊勢原の阿夫利山（大山）へ行く道に、足柄平野を千代から曾我を通り、上大井へ出て、そこから山の方へ山田・篠窪と入り、渋沢（秦野市）に抜ける道がある。この上大井から山田に行く間にある長い坂が「ヨミの赤坂」と呼ばれるこわい坂である。

家がなく、一人で歩くのが怖いような、うす暗く曲がりくねった道である。昔は、もっともつと細くてがたがたと急な坂であった。それに両側から木々が覆いかぶさっていたので、よほど勇氣がないと通れなかった。

それでも通らないわけにはいかなかったので、ついみんなで騒いで通ったり、走って通り過ぎようとするのだが、坂の途中まづへるど、いじからうともなへ、「袖をいいていけえ」と声がする。「で、でたあ」たいていの人は足がすくんだり、腰をぬかしたり、もう夢中ではいすゑううにしていって、山田村にたどりつくのだそうである。

そして、ひよいと自分の着物のたもとを見ると、片方の袖をなくしている。なんとも恐ろしいことだが、このあたりの人は、始終通らなくてはならないので、いろいろなおまじないをするという。つばきを額につけるとか、初めから別の袖を用意して、坂の途中でおがんで置いてくるとか。

もう一つ、効き目のあるおまじないがある。それは赤坂にさしかかったら、「千代の四方坂が見える」といって通る。すると化け物は出てこないという。なんともおかしな化け物だが、実はこの化け物は、もともとは平野と山地を結ぶ橋のような役目をしている、この坂を守る神様だという。



狐きつねに化ばかされた話(民話)

昔、ある旅人が一本松いっほんまつの根もとで休みながら遠い小田原の海を見つめていると、いつか知らない間に自分の足もとへ海がおしよせてきて、足もとへザブザブときたが、ちっとも冷たくな
い。これは変だなと気がついたので、煙草たばこに火をつけて落ち着くと、いままでの海の波水なみみずはいつのまにか消えて、もとのままとなった。一休みしている間に狐狸こりにいたずらされたものである。

また、あるとき、一人の旅山伏たびやまぶしが小田原から大山へ渡るとき、この一本松までくると、大きな狐きつねが大田塚の根でいい気持ちで寝ねているので、ひとつおどかしてやれと思い、持っていたほら貝を狐の耳にそっとあて、ブウブウと吹いて鳴らした。狐は驚おどろいて一目散ひとみさんに金子山へ逃げ去った。

すると今まで高かった日が、矢をいるように西山に沈んで、あたりはとつぷりと暮れてしまった。旅人はすっかり困こまってしまつて、途方とほうにくれて四辺を見ると、たった一つ灯あかりが見える。その灯りを目当てに近寄っていくと、山門りょうぎに了義寺と書いた一宇いちうの寺があった。

旅人は庫裡くらの方になにかゴヤゴヤと人の声がするので、大きな声で「頼もつ、頼もつ」と呼んだが、しーんとして答えない。たしか灯りもついているし、人声もするし、「変だなあ」と思い、再び大声で尋ねた。すると一人の僧そうが出てきた。

旅人が一晩の宿を請こうと、僧は「それは困ったことだ。今夜は当寺に少し取り込みごとがあつて座敷ざしきがふさがっている。お気の毒だが、お貸しすることはできません」と断つた。

旅人は本当に困って「もし、座敷がふさがっていたら本堂の片隅かたすみでも結構であるが、ぜひお頼みしたい」と頼んだ。僧はそれならばといって、本堂の片隅へふとんを貸してくれたので、旅人はそこに一夜を明かすことにした。

すると夜もしんしんと更ふけるころ、静かな夜をやぶって、チャンチャンと哀韻あいいんを引いたお葬式えうしきの野辺のべの送りの鐘かねが聞こえてきた。旅人ははっとして目が覚めると、鐘の音はだんだん近くなつて大勢の人数がゴヤゴヤと石段をあがり、そして表あなまわで穴廻りねんぶつの念仏となを唱えている。

旅人はぞくぞくとふるえながらふとんをもたげて見ると、先の僧が本堂に葬式を迎えてなにやら口中で唱えている。そのうち経も済んで僧が庫裡に引き取ると、大勢の者は葬式の棺を本堂に置いたままドヤドヤと消えるように去っていった。

さあ、旅人はがたがたとふるえていると、そのうちガタンと音がした。すると、棺がみしみしとゆれて、棺のふたが本堂の板の間に音を立てて落ちて、中の白い布がゆすれて動くのが見えた。旅人は驚いて立ちあがり、本堂の廊下を一生懸命に逃げて、つきあたりの階段を昇って二階へあがると、下からばたばたと階段をあがってくる音が聞こえる。



もうこうなってはと戸をはすそうとしても、あたりは一面に壁で戸がないので、壁を破ろうと持っていた小刀で一生懸命で突き破ろうと、汗びっしょりになってつきさした。

そのころ一人の馬方が赤坂を馬子唄をうたいながら登ってくると、一人の旅人が一生懸命で畑の畔を小刀で突き刺して、真っ青になってやってくる。しばらく見ていたが、これはことによると狐にでも化かされているのではないかと思い、そばによって旅人の頭をぽかりぽかりと打った。旅人は「おお」といって正気に返った。旅人はびっくりした。今まで寺の壁だと思ったところは、一本松の少し下の、金子山の畑の畔であった。まだ日は高々としていた。旅人は狐をおどかした仕返しに、今まで苦しめられたおそろしさに今更ながらきもを冷やした。馬方は下山へ下っていった。旅人は篠窪の方へいそぎ足で去った。この話を馬方から聞いた村人は一本松の老狐をぞっと感じた。

● 狐狸…狐と狸。ともに人をばかすと信じられていた。

● 一字…一軒

● 庫裡…本尊への供物や住僧の食事の調理などをする建物

● 哀韻…かなしげな調子

曾根家の伝説

ここに曾根家について種々の話がいい伝えられているので、その一二二つを記す。

曾根家隆盛のころ、庭石の大きき、畳何畳敷かの大石を下の沢から庭師や仕事師の音頭により、最寄りの者ども大声して、よいさよいさと引き出して運んだ。そのころのことであるので、全く人の力によって引張って運んだ。主人はその上に座して、数人の妾に酌をさせ、酒盛りをしたという豪勢な生活ぶりであった。

また、ある雨の日商用で江戸に行き、一夜の宿所に宿したときのこと。鏡のように拭き清められた廊下を、土足、わらじはきのまま部屋まで入った。おどろいた番頭や女中があわてて顔色を変えて注意すると、「そんなに騒ぐことはあるまい。金をとって宿する宿屋ではないか。」

いま自分の歩いた足跡を数え、小判を一両ずつ置いて払うたら文句はあるまい」といって、供に小判一両ずつ足跡に置かせたという。

主人と番頭は啞然としてかつ喜んだ。田舎にも豪勢な者もあるなあといった。あとで小田原大久保の御用達と聞いてびっくりしたという。

またその反面、公共の事柄として山田から小田原へ至る道に架ける橋を全部石橋としたこと、いままで残る橋には山田曾根姓を刻んだものがある。上大井大橋、西大友石橋、飯泉裏表の橋、そのころ酒匂川は飯泉の渡し、井細田の橋、寺町の橋、小田原出戸橋、いずれも曾根家の架けたものといひ伝えられている。最近まで西大友、上大井の橋にはその姓が見えたが、近時道路改修や幅員改良等によって架け替えされたものが多い。

また、曾根家の表門は朱塗りの結構をつくし、立派なもので、そのたち丈余堂々たるものであった。曾根家没落のとき、これを買ひ受ける者がなかった。その後松田の中村家に売り渡されたが、中村家もこの門の修復に困った。そのころ人呼んで「困り門」など称したと聞く。この門の始末に困った中村家では、長い間立ち腐れにしていたと聞く。

また、屋敷内に大井戸があり、その側には御影石積みであった。

また、庭石も曾根の稻荷様のわきに埋まっていると聞く。

明治のころ、故三遊亭円朝の作で、「蝦夷錦故郷土産」「椿説蝦夷なまり」の二巻は曾根家を取材して書いた女天一坊である。（この作のうちに了義寺の石段の数や天神社前の地神尊天の碑など書かれている。）



●御用達…認可を得て、宮中、幕府、諸大名などに用品を納入する商人。

●たち丈余…高さ一丈約三メートルあまり。

●結構…建造物の全体の様子

●女天一坊…「將軍家のご落胤」の女版

むじなの化けた話

夕刻ゆふぐになって、遠くからホーイホーイと呼ぶのは、必ずむじなの仕業しわざである。

野良仕事のらじしよをして疲れきった身で野道のみちを帰ってくるところ。どこからともなくホーイと呼ぶ。物恐ろしくなると家路いへじに急ぐ。「ああ、かかはいるか、今日むじながおれを呼びやがった。よっぽど俺もホーイと答えるように思ったが、恐ろしくなって急ぎ足で帰ってきた。むじなの畜生うしこ、きつと山王山さんおうざんあたりに巢すをつくって俺たち人間を化かそうとしているらしい。ホーイホーイはかけている。」

こんな話をいろいろばたで聞かされる子どもたちはしんみりとして、まず便所べんじょへ行くのが恐ろしくなつたものだ。「おっかあが、でっけえ眼まなこをしているからでえじょうぶだ。いってこい、いってこい」「母のその強い目を見入りながら便所へ立つ。

彼ら子どもにとっては、この母の大きい目にどんなに勇気ゆうきづけられたことだろう。

むじなの化けたのには、もっと込み入った話がある。それは昔から医者をしていた家の話である。医者といっても、もちろん農業を兼ねていたわけである。

冬も夜中のこと、その声は明瞭めいりょうではないが、「三碩さんせきさん、三碩さんせきさん雨が降ってきたよ。干し物入れな」と呼ぶ。静かに聞き耳を立てると辺りはしんとして、何一つ音もしない。なんだ、またむじなのいたずらか、と寝入ろうとすると、また前と同様の言葉を繰り返す。むじなのいたずらか、それとも本当の雨か。外へ出てみると、雨どころか星が降るようにいっぱい輝かがやいている。なんとということが、むじなめ、といって家に入り床こゝろに着く。

むじながものを言うというのは、実はむじなが
身を逆立ちさかたにして、その尾を戸の隙間すきまに入れて、
キュウキュウ、キュウキュウこすると、その音が
ものを言うように聞こえる、という話である。

●むじな…アナグマの異名。タヌキに似ている
ことから人を化かすと信じられた。



狐を化かした話

篠窪村にむかし安右工門という利口な百姓があらった。

ある年の暮、十日市場(今の秦野市)へ暮の買い物に馬を引いて出かけた。買い物を手間取れて、篠窪へきたころは、もう足下もよく見えなかった。やがて喜嬰寺山へさしかかるのである。この山には常々わがしこい狐がいて、人を化かすという話である。その山へ安右工門はさしかかったわけだ。

馬方唄を歌いながら、やがてその山をなにこともなく通り過ぎようとするころ、目もあざやかな美しい女がそこに立ちすくんでいる。おやつと思って見とれると、女は「秦野の先の者ですが、これから松田の方へ行こうと歩いてきましたが、もうどうにも疲れて歩くこともできません。なにとぞ私を連れていってください。」

安右工門も美しい女に頼まれたので、悪い気持ちではなかったらしいと同時に、「こいつ狐の化けたのに違いない、なぐり殺そうか」と思ったが、もしも本物の女であったなら、それこそかわいそうなことになると思って、ちょっと思案にくれた。なんとしても美しい女だ。よし、荷がついているがこの馬にお乗んなさい。わしが途中まで乗せていってやろうと、その女を抱いて乗せようとすると、その女は軽々と馬に乗った。暮の買い物のうちには、もちろん油揚げもあって、馬の背につけてあった。

「はて、あまりに軽々と馬へ乗った。おかしい、そうだ、狐が化けた女は必ず着物の縞がはっきり見えるという。そうだ、暗いのにはっきり見えるのを見ると、狐だ」と自信をもった。

ただし打ち殺すにはいかにも美しい。そこで一案を考え
た。よし、降ろることも、どうすることもできないように
手足を荷縄で馬の鞍へからげてやろうと、「そこで姉様、
馬が暴れると落とされる心配があるから落ちないように
荷縄を身へつけよう」といって、ぎろぎろにからげたが、
その女は馬の背の油揚げを食べたためか、安右工門のい
うとおりにした。

千村のわかされ、それから弘法の硯水を通して、篠窪
の家についた。妻の名を呼んで、今帰ったよ。今帰ったよ。
喜叟寺山からお客様をつれてきたよ、というつ、その美
い女も正体を現して、きゃんきゃん鳴き出した。安右工
門は、この化け狐め、おまえがどんなにわるがしくても、
人間の方が利口なのだ。

狐の化けたのは着物の縞が夜でも明瞭に見える
ということに目をつけたのが、安右工門の知恵であ
ったという。



狼が礼にキジをもってきた話

篠窪村に与四郎というとても狩のじょうずな百姓があった。農のひまに狩人をした。

あるときその仲間の者と一緒に狩りに出かけた。今の神山滝の水源にあたる羽口沢から梅の木沢へと行った。そこに狼が子を生やしているのを見つけた。「やあ、これは狼の子だ、全部とって行こう」と、仲間の者たちはいった。

狩はじょうずでも人情に厚い与四郎は、「いやいや子をさらっていくのはかわいそうだ。見逃してやろう」といって、助けてやった。その日はたいした獲物もなく家へ帰って、「今日はよいことをした。狼の子を助けてやった」など、いろいろばたで家族の者にもはなして、ぐっすりと休んだ。

次の朝、雨戸を開けると、外縁にキジのおんか(オス)が置いてあった。「ああこれはあの子を助けたお礼に狼がキジを持ってきたのに違いない」といって喜んだ。その日また昨日の場所へいってみると、狼の子は一匹もいない。みんな他へ移してしまった。獣でさえも子を助けられた恩義は忘れないものだといって、感心した。



死期が知れた話

今では地福寺の境内にあるが、昔は矢倉沢往還の榎木堂というところにあったという。徳本行者自筆の碑がある。もちろん浄土宗の僧なので、南無阿弥陀仏と刻んである。その徳本行者を信じて死期がわかったという名主甚左工門の話がある。

彼は年老いては本当の念仏三昧であった。

あるとき、村の念仏仲間の人が、今日は千村でおおがいがあるので、名主さん一緒に参りましょうといった。

おおがいの場所は、弘法の硯水のすべわきで芝原があり、近來までおおがいがあったというが、今ではどうなったことかわからない。

念仏の好きな甚左工門はこう答えた。「今日、わしは正九つに徳本さまがお迎えに見えるから、行けないのでよろしく頼みます」



徳本行者の碑

それから家内の者を集め、「今日一緒に赤のかゆをたきなさい、今日正九つにみんなとお別れして行くのだから」といった。

家内の者は元気な甚左工門がこんなことをいうのでとても驚いた。念仏仲間の人も変なことを言われるなどって、そのままおおがいに出かけた。

家内の者と赤のかゆを食べながら、正九つになると、眠るがごとく、息を引き取った。念仏三昧になると死期もわかるものかと驚き悲しんで、数代の後まで言い伝えている。

● 徳本行者…江戸時代後期の和歌山県の名僧

● おおがい…春と秋に酒を飲んだり、歌をうたったりする会

● 正九つ……正午

種茄子の話 たねなす

しのへば
篠窪のある家の話である。

農地も相当多く所有し、働き者の夫婦があった。
朝はうす暗いうちに起きて働き、夜は一番鶏が鳴 いちばんどり な
くころまで働いた。

夫は背が低く、妻は大女であった。 おおおんな しかし、二人の間はいたって仲良く暮らし、子どもも次から次へと生まれた。

妻がある朝、いつものように暗いうちに起き、子どもを背負って畑へ行った。ちょうど茄子がもぎごろになっているので、はさみでしょきしょき切りはじめた。

背で「オイ」と妻の名前を呼んで、「その茄子は種茄子だよ、もぐな」といった。

大女の妻は驚いて振り返ると、子どもだと思っ おどろ
て背負って畑へ来たのは、彼女の夫ではないか。

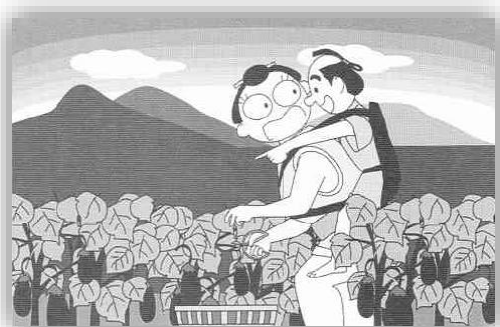
「おめえはまあ、なんてことよ、今までだまって」といって悔しが くや り、畑へとさりと降ろした。

夫は、あまりのおかしさにからから笑って、「おまえが慌て あわ んぼうだよ。俺が身が小さいからって、夫と子どもの見分けくらいははっきりしろよ」といった。

妻は悔しがる。夫はおかしさに笑う。妻も自分身の慌てものに気がついて、悔しさが半分、おかしさが半分、おめえも小さく育ったものよなあ う。 と笑う。

「だって俺が好きで嫁にきたじゃねえか」「私はおまえにころころ騙 だま されたんだよ」「俺が小さい身をいつ大きい身 き といって騙した？ 見ればわかる」とじゃねえか。俺はお前の気前 きまえ に惚 ほ れて、身はばかでえがもらう気持ちになったんだ」「気前に惚れて？ それあ、こっちのいうことだ」

二人は笑っているのか、けんかをしているのか分からなくなってしまう。



しゃもじの入道の話 にゅうどう

ある臆病おくびょうの若者わかものが大山参りに行った。そして帰りに大きなしゃもじを買い、持つのもおっくうだと、腰にはさんで家路いえじに急いだ。家に近づくころは夕暮れゆぐれがせまっていた。

いつものように足早あしはやに歩き始めた。村外れむらはずのとぼし火が見えるところまで帰ってきたとき、これで一安心と見るともなしに、後うしろを振り返った。そのとだんに、背の高い入道いんどうが立っているではないか。一目散ひとみはなに大変だと叫びながら家の戸口とぐちまできて、今帰ったと叫びながら、小べりの戸をガラッと開けて入ろうとすると、なにかに腰を抑おさえられて入れない。あー、入道だ、とその場に倒れたたお。若い妻は驚いてみると、今朝頼けさたのんだしゃもじを腰に差して倒れている。

入道だ、入道だと震ふるえている背中に、妻はしゃもじの大きいのが入道に見えたのだと気付いて、急いで取り去った。若い夫は這はい上がるように座敷ざしきに転げ込んだ。入道に見えたのはこの大しゃもじだった。若い夫は自分の臆病おくびょうに今更いまさらのように感じ入った。水くれ、腹はらが減った。妻はいそいそと立って食事の用意をしながら、ああ私が悪かった。大しゃもじなど頼んで、私がおどしたようなものだ、と悔くいた。



てんぐ

天狗の話

篠窪鎮守の森を俗に椎の木森という。昔、富士登山の道者、

おおやま

大山登山の道者は、この街道に覆い被さる何百年かたった椎の

木森の下で、暑さと旅の疲れをいやしたであらう。このところ

あつ たび つか

より大山へ5里、道了尊へ3里、昔よりこの椎の木森は、天狗

てんぐ

の休み場所といわれていた。

風もないのに大木が倒れたことがあった。それを天狗の仕業

たいほく たお

だと信じた。

またあるとき、この森でツイコン、ツイコンと木を引くノコ

ギリの音がした。やがて、わりわりとさんと地響きをたてて大

じび

木が倒れた。森へ行ってみると木一本倒れてもいないし森閑と

しんかん

して誰もいない。天狗の仕業に違いはないと思うと、急に恐ろし

くなって家へ走り帰った。

また天狗は笛太鼓が好きで、ときにこの森で笛太鼓の音がし

ふえたいこ

て、なにかにぎやかに聞こえることがある。天狗は子どもが好

きで裸で遊んでいるとき、天狗がさうとよく言伝えている。



天狗について、近村の話だが、ある一人の百姓がいつもの

きんそん

ひゃくしょう

ように湯にはいって、上がり段でふんどしひとつで涼んでいる

だん

すず

と、そのまま神隠しにあって姿が見えなくなった。家中の者は

かみかく

驚くやら騒ぐやら、近所隣も総出で探し歩いたが、その人を

おどろ

きんじよとなり

そつて

だれひとり見たものがない。家の者も、もうこれまでとあきら

めてしまった。

それから3年の月日がたったある日、その百姓はもとのまま

で、ふんどしをかけたまま上がり段に立っている。妻は、やあ、

うちの人といって、しっかり抱き着いて離さなかった。その百

だ

はな

姓は手に備前徳利をさげていた。どうしたことが夢ではないの

びぜんてんぐ

かと妻も思ったが、現実夢ではない。

その夫に向って「今までどこにいなすった」と聞くと、
「やあ俺は天狗様と遊んでいたよ。相撲が好きで毎日相
撲ばかりとって遊んでいた。何でも食べたいものはくれ
るし、とても楽しかった。酒も飲めるし、これはその酒
を入れた備前徳利だよ。ふんどしが汚れたので家へ帰っ
てかえてこい、といったので、今まいもどった」と答え
た。家の者も近所のの者も不思議なことがあればあるも
のだといって驚き、かつ生きて帰ったことを喜んだ。
それからその人は祭典のときは、天狗の面をかぶって
あるく役をすることになった。今でもそのときの備前徳
利が大切に保存されているという話だ。それから代々祭
典のときの行列、猿田彦の命（天狗）はその家で勤め
ているという話だ。

天狗の持つ空とぶ扇は、天狗葉であるのがちよっとおもしろい。葉が他の植物の葉より特に大きく、茎も頑丈で、葉も厚く紅葉の様で五つにさけて、なんとなく風がおきそつである。昔の人の素朴な考え方が実にゆかしく思われる。

●道者…社寺を参詣する旅人。巡礼

●上がり段…高い所に登る階段

●猿田彦の命…日本神話の神、道の分岐点を守り邪霊

の侵入を阻止する神

人魂の話

故小島巖氏記

これは私の祖母の話である。

祖母が若いころ、その嫁が亡くなったので毎晩墓参りに行かれる。ちょうど七日の晩であった。いつものように墓参りに出かけると、南の方から真つ赤な火の玉が空を飛んで、その後ろにのろをひいてどこかに消え去った。

人の身は滅びても、魂は滅びない。人間の身からぬけて自然のどこかで、空のどこかで、また再び人間の体内にやどり、生まれ変わってくるという信仰が残っている。そしてその赤い玉は、人間の魂であると信じて人間の永久不滅を、そして輪廻転生を信ずるともなく信じていた。

この魂におどされ、嫁の道を欺いてはならないと心に決め、不思議な恐怖におののきながらも狼狽の様を見せず、墓参りをすませたという話である。

また、父の子どもの時代の実話であるが、屋根の西側に小さな火の玉が、ふわりふわりさまよっている。父がそれを箒ではらったりすると、その火の玉はちらちら、ちらちらと散乱して消えうせた。もちろん、魂でもなんでもなく、なにかの自然現象だろうといったことを覚えている。

お寺のお坊様が本堂になにかどんと物のあたる音が大きくする。それは人間の魂が抜けて、寺の本堂にくるのだらう。きつとその後、誰か家で葬式ができる。こんなことも半信半疑のまま、消え去っていく話である。



狐火の話

この頃^{いんげんころ}狐火の話などすっかり聞かなくなった。事実まだそれらしいものも見ない。

私達が子供の頃は、都会には電車があり、自動車があっても片田舎^{かたいな}は馬車があれば上等だった。私の村は、山里なので何処^{どこ}へ行くにも徒歩であった。商店も僅^{わずか}かだし冬の買い物のときなど、帰りは必ず暗くなってであった。父母の買い物の帰りを迎え^{むか}に出るのが子供たちの役であり、またそれが楽しかった。

その内で一番おそろしかったのが狐火である。

狐火は、村境高公^{むらさかいたかたけ}につく

一つついたと見る間にツ、ツ、ツ、と三つ四つ五つと連なっていく。こちらが消えると思うとまた、次へつく。其の点滅^{そくてんめつ}の速さ、「兄ちゃん、姉ちゃん、大丈夫か」といって兄弟どうし力のなりあって、かたずをのむ、あゝ、またついた。あんなについた。

狐火が遠く見える時に近くに狐がいるのだ。用意に持っている竹の棒であたりを払う。

やがて、父や母の話し声^{ちやうちん}がして提灯が近づいて来る。これは狐火ではない。本当の提灯だ。

話し声が近づいてくる。こちらでも提灯をふって「おかあさん」と呼ぶ、「よく迎えに来た。帰ったよ。いいお土産^{みやげ}があるよ」と聞いたとき、もう狐火は何処かに消え失^うせていた。



狐づきの話

病人が長く病んで、なにか精神に異常をきたす。言葉が非常に丁寧ていねいになって、家族のものに客人あつかいのような言葉をつかったりする。

私は、どこそこの山から来ましたとか、自分の孫に対して、こちらのお孫様は、など言ったりすると、これはおかしい。あの山から来たなどという。なにかついている。それに近ごろ、急に魚がすきになった。眼の色が違っている。食べ物もたくさん食べる。

狐が身のどこかにいて、この病人を使ってなにか食べるにちがいない、というような簡単な考えから、狐づきなどということが考えられ、加持かじ、祈祷きとつなどする場合さえあるという。

ちょっと考えられないようなことから、哀あわれな死に方を
する人もあったらしい。



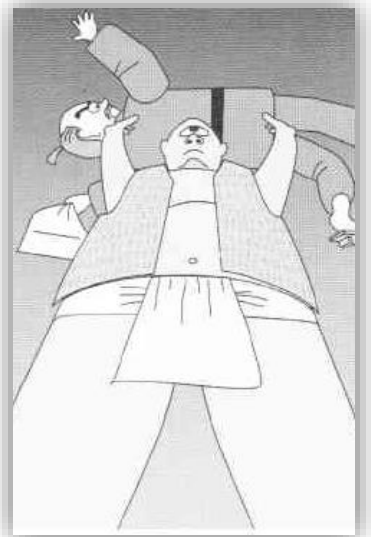
みこし入道の話

道益どうえきというお医者いしやがあった。いつものように病家びやつか栢沼かやぬまへ行った帰りに千村ちむらへまわり、病家びやつかをすませて帰ることにした。千村から自分の家いへ篠窪しのくぼへ行くには沼城ぬましろの下しもの宮みやを通らねばならない。

ところがその下の宮は神樹かみじがうっそうとして、みこし入道みこしいるでが出て、人をなやましてほとんど生きて帰った者がないといううわさで、夕刻ゆいこくからは誰一人も通らなかった。誰もかもおびえきっていた。

そこを通るというのだから病家の人々も、まあ、今夜はこちらへ一泊して明朝みょうちゆうおかえんなさいとしきりにとめた。

道益どうえき医師は、実に度胸どくちゆうのいい医者であったので、そんなことには驚おどろかない。そんなものがあるものかと言いい張はってとめるのもきかず、病家びやつかを辞じして帰路きろへついた。八沢はっさわから柳川やなぎがわを通り、いよいよ下の宮へ来た。なるほど誰一人、あわないと思おもっている内に後からぎゅうと抱だきかかえられてしまった。



さすが、気丈きじゆうな道益どうえきも驚いた。見る見るうちに高く高くさしあげられてどうすることも出来なかった。刀を抜ぬくにも抜く間がない。

脚あしで入道かたの肩かたをどんどん、どんどん強くつけた。一寸入道ちようとが抱える力をゆるめたので、ここぞと伝家でんかの銘刀めいとうに手をあてたが早いか、入道の肩のあたりをめがけてさっと切りつけた。それが早いか医者は高たかままの上にほおりおとされた。

それから一目散いちもくさんに千村の病院へ来て次第しだいを話し、家に帰ったが、それがもとで足がはれ、ふくれ3年病やんで他界たかいされたという。其そのときの腰刀こしかたなは銘刀で其の身の一大事いちだいじという時以外にはなかなかすりとは抜けないという。戦前の頃までよく其の銘刀の話はなしを聞いたものだ。

●神樹：神霊が宿ると伝えられる木

弘法の硯水

故小島巖氏記

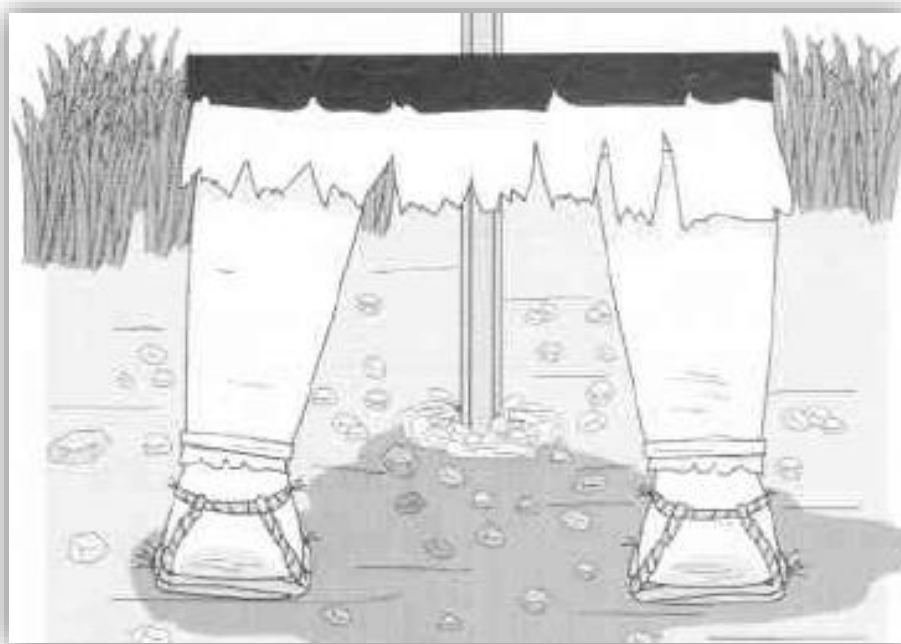
一本松を過ぎて約2丁ばかり、山の頂になる。

そこは山の頂上にもかかわらず、一年中水のきれることがない。付近には、水草さえ生えている。清水が湧出するというほどの水量ではないが、澄みきった水がちよっとしたくぼみに僅かに流れ出ている。それを昔より弘法の硯水といいつたえている。

昔、弘法大師がこの峠にさしかかって、なにか記そうとされたが、水が一滴もない。静かに手に持った杖をさしこむと、清水が湧き、それを硯水にされたということである。

昔ここは富士大山道で人通りも多く、硯水のかたわらには茶屋があって、旅人にさまざまなつば焼きなど売ったところである。

茶屋といえば篠窪の榎の本にも茶屋があり、旅人の憩いの場所であったという。夜は人通りも少なく山の峠なので、それぞれ家に帰ったというところである。



お蝶切り藪の話

お蝶切り藪は、かみやまだひがしにわ上山田東庭の付近といい伝えられている。むかしお蝶というお屋敷女中が不義のためこの藪で成敗されたという。よく老者のろうしやはなしに「おちよ切り藪」ときいたが所在不明である。

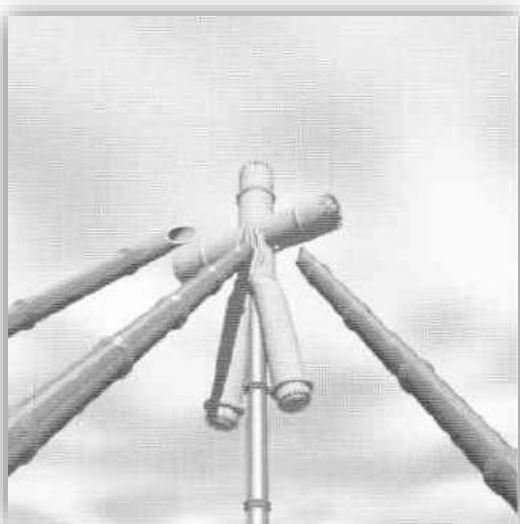
このほかに上山田のお林はやし付近に「見越入道」やきつね「狐に化かされたはなし」などよく聞かされた。



藁人形

村でなにか盗難にあった。そしてその犯人がどうしても出ない。そうしたときだったと思う。鎮守様の社前に村中の人が集まって藁人形わらをつくり、竹で高くその人形を捧げ、村の人がなにかいいながら、その藁人形をついたのを覚えている。

藁人形をつくることによって、その犯人が苦しみ、やがてはつきりわかるという。信仰からであったと思う。



あまごいてんどう

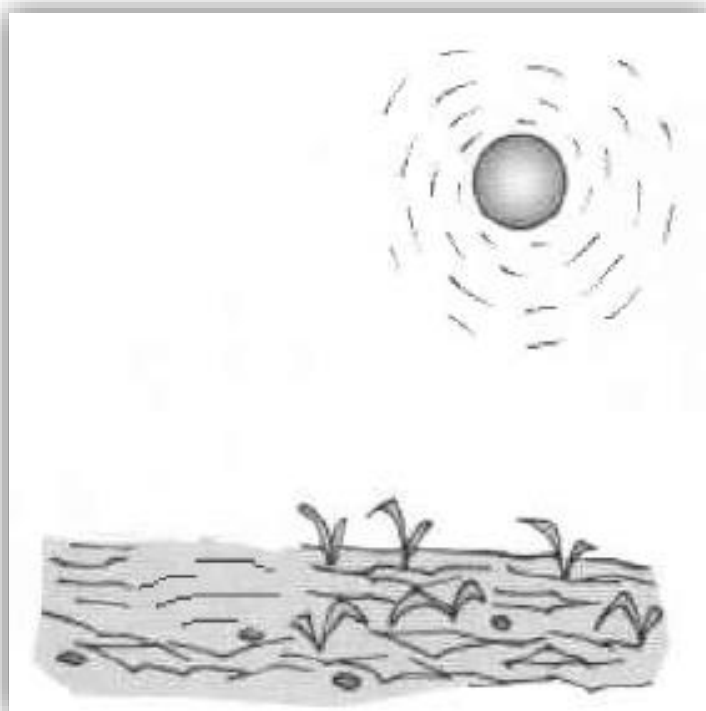
雨乞天道念仏

農家にとって天候ほど関係の深いものはない。しかもその天候は、人間の力でどうすることも出来ない。

そして、晴天がつづくと百姓たちはおびえおののいてしまう。それは単に損得の問題ではない。命をつなぐ糧^{かて}がないからである。今のように交通も発達し、何処からでも食糧が輸送される時代とは違う。不作になると何人の人が餓^うえ死んだのか。そして雨乞^{ひで}いという行事は真剣^{しんけん}に行われた。

日照^{ひで}り続きの晴天に、蓑笠^{みのかさ}を付けて川に集まり、互いにさんげさんげと唱^{とな}え無我夢中で水をかぶる。そして、雨の降るのを祈願^{きがん}したのであった。

天道念仏^{てんどう}は、寺の本堂で、こん気力のかぎりをつくして念仏を唱え、鐘をたたいて雨の降るのを願った。これらは何れも、生命につながる重大な問題であったからであろ。



花女郎松の話

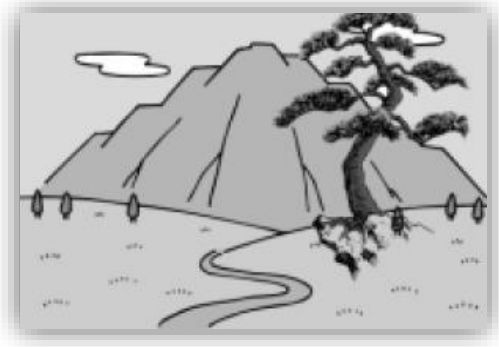
弘法の硯水、雁が音松を通りこして栃窪へ行く道の側に、花女郎松といひ伝える老松があった。

何時の頃か不明であるが、お祝言のよろこびに満ちて、家族、親戚、各人一行はこの山道にさしかかった時、突然その日の祝言の主である花女郎の姿が消えてしまった。

何う叫んでも呼んでも見付けても、遂に手掛かりなく、不思議なことといつて土地の人の語り草になった。そして誰いうことなくそこにある松を花女郎松といった。

その松も明治の頃切り倒されたが不思議なことにそれを切った職人は間もなく死んだということだ。

●花女郎……花嫁



山之神の話

村でも評判の働き者があったと云う。おじい様が正月十七日山の神の祭りの日にもかかわらず、山へそだとりに出掛けたが、やがて顔色を変えて帰ってきた。山の神さんが烏帽子したたれて出てこられた。身の丈も大きい、そして、真っ白な髪で、鼻が高く色くろぐろとして・・・それが無性に恐ろしくなって命からがら帰った。山の神の日になど決して山へ出掛けるものではないと云い伝えている。

●そだ…まきに用いる木の枝

かりが音松の話

篠窪から一本松へ登り、弘法の硯水を通り越すと、遠く丹沢の山々をながめ眼下に秦野盆地を見下す眺望のすべれた山、千村と渋沢とへ通ずる別れ道のやや下にかりが音松と云う所がある。

古へは足柄山を越えて武蔵に通ずる矢倉沢街道であった。今は、ほとんど通る人もなく、秋は萩が道をせばめ、草の露にぬれて徒歩でさえ蜘蛛の巣を払行く細道である。

遠く夫を尋ねてか恋人を慕ふてか、遥々京都あたりから数十日を旅をつづけてこの山に來た。哀れなことに急に病を得て一人淋しく死んでいったとい

土地の人々が深く哀れみ、ここに骨を埋め、そのしるしに松を植えた雁が音松という。それもとうの昔に切り倒されて誰土地の人の語りぐさとして残っている。ある人はいう、そこには小さな碑があつたというがみあたらない。今は誰雑草の中に萩女郎花が彼の女の塚を守るように咲いている。

雁が音というなまえから考えて奈良時代から平安の頃のある高貴な女の生涯であつたと思つ。

※雁が音：ガンの鳴く声。またガンの別名

